

# 中国における〈竹内好〉という問題

高 峽

## はじめに

1 薛毅・孫曉忠編『魯迅与竹内好』中国：上海世紀出版股份有限公司上海書店出版社、2008年、255頁。

2 孫歌「那覇から上海へ」『歴史の交差点に立つて』日本経済評論社、2008年、55頁（なお、原題は「从那覇到上海」で上掲『魯迅与竹内好』にも収録されている）。

3 鶴見俊輔・加々美光行編『無根のナショナルリズムを超えて—竹内好を再考する』日本評論社、2007年、5頁。

中国現代文学研究者の坂井洋史は、「略談“竹内好”應該緩論」<sup>1</sup>のなかで次のようなエピソードを披露している。2005年5月に中国華東師範大学で行われたシンポジウム「中国現代文学研究：重建学科的合法性」に坂井が参加したさい、中国の若手研究者が脈絡もなく何かというと竹内好に言及するという場面に出会ったという。坂井はそれを「持って来い政策」と呼び、それらの安易な依拠には竹内好を理解するための、日本社会・思想・文学、特に日本のモダナイゼーションの過程、およびその思想的限界などのコンテクストについての知識があまりに欠乏していると非難する。この指摘の当否はさておき、2000年以来、竹内好は確かに中国で頻繁に論じられるようになった。

孫歌によると、「竹内好の論考の翻訳はすでに中国語、韓国語、ドイツ語、英語の四言語によって翻訳出版されているが、しかしいずれも二〇〇四年から二〇〇五年に集中している」<sup>2</sup>という。たとえば2004年9月にドイツのハイデルベルク大学では、世界初の竹内好に関するシンポジウム「竹内好——アジアにおけるもう一つの近代化を考える思想家？」が開かれ、続いてその翌年2005年12月中国上海にてシンポジウム「魯迅与竹内好国際学術研討会」（以下「上海シンポジウム」と略称）が開催された。さらに翌年2006年に愛知大学にてシンポジウム「日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換——」が開かれ、加々美光行によると、これは1977年竹内好がこの世を去ってから初めての「日本では竹内好が残した課題を改めて取り上げるシンポジウム」であったという<sup>3</sup>。

このように中国における〈竹内好〉という問題は、竹内好を問題化する国際的関心の契機を作る大きな潮流の一環であることが分かる。本来であれば、「中国における〈竹内好〉」という問題はこれらの連動する動きの中で捉えられるべきであろうが、筆者にはそれを遂行するだけの準備も能力もない。また、現段階で入手した資料上の制約があるために、ここでは中国における竹内好に関心を絞って竹内好がどのように問題化されたのかを整理してみたい。

## 1. 中国における竹内好

4 竹内好（李心峰訳）『魯迅』中国：浙江文艺出版社、1986年。

5 張寧「“竹内魯迅”的中国位置」前掲『魯迅与竹内好』、199頁。

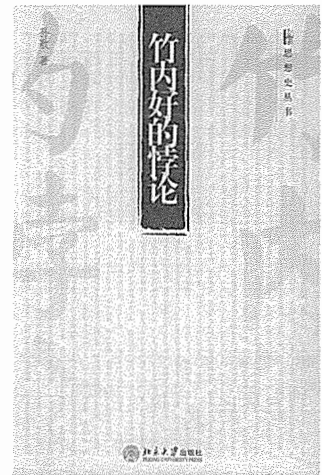
竹内好が中国で本格的に紹介されたのは、1986年に『魯迅』が李心峰訳で「国外魯迅研究資料叢書」の一つとして出版されたのが最初であるが<sup>4</sup>、これは魯迅研究界隈の外ではあまり注目されなかったようである<sup>5</sup>。ところが、孫歌『竹内好的悖論』（中国：北京大学出版社、2005・2）、『魯迅』（再訳）、「近代の超克」、「近代とは何か（日本と

中国の場合)」などの文章を含めた竹内好評論集『近代的超克』(孫歌編、中国：生活・読書・新知三聯書店、2005・3)の出版以来、竹内好の名前は魯迅研究界を超えてすでに注目され論じられるようになった。2005年9月雑誌『読書』による竹内好に関する座談会、2005年12月シンポジウム「魯迅与竹内好国際学術研討会」の開催、およびその後出版された論文集『魯迅与竹内好』などは、その現われの一つであったと言える。

魯迅研究界における竹内好の『魯迅』の影響について、北京大学の張麗華はこう書いている。「半世紀が過ぎたが、この薄くてしかも濃厚な研究者個人色を帯びる『魯迅』は、依然として日本、中国ないし世界規模の範囲での魯迅研究に、引き続き学術エネルギーを供給している。日本の魯迅研究者丸山昇、伊藤虎丸、木山英雄といった先生方はもちろん、中国のより若い学者例えば汪暉、鄧元宝などの魯迅研究も、深く竹内の影響の痕跡をとどめている」<sup>6</sup>。つまり魯迅研究界に限って言えば、竹内好の『魯迅』の影響は決して小さなものではなかった。それでは1986年に中国に紹介された竹内好と、近年のそれとはどのように違うのであろうか。

上海シンポジウム参加者の一人であった李揚の発言が、今回の竹内好の反響の大きさについて何らかのヒントを与えてくれる。李揚は1986年の李心峰訳『魯迅』を読んでそれほどの感興を持たなかったという自らの経験を踏まえ、「今日、何が改めて私たちを動かし」たのかという問題を提出する。それに対して李揚は次のように答えている。すなわち、竹内好の『魯迅』以外の著作が中国語に翻訳されることで、魯迅研究者としての竹内好を超えた竹内好の“悖論(パラドックス)”が我々の前に現われてきたのである、と<sup>7</sup>。ここで“悖論”という言い方は、孫歌の『竹内好的悖論』という著書から来ており、これはこの間に挟まれている孫歌をはじめとする紹介者、翻訳者の役割がきわめて大きかったということの意味している。その仲介者／研究者としての孫歌の存在感があまりにも大きかったゆえか、李揚は上海シンポジウムのテーマを、「竹内魯迅」と「孫歌竹内」との二つに纏める。ここで「竹内魯迅」とは、端的に言えば竹内好による魯迅研究を指す。一方「孫歌竹内」とは、文脈から推測するに、おそらく孫歌の一連の紹介・研究を通して見えてくる竹内像を指すものだろう。ここには、1986年の『魯迅』翻訳に伴いはじめて中国に紹介された竹内がもっぱら魯迅研究者として扱われてきたのに対して、孫歌をはじめとする日本研究者の紹介、研究活動を通じて、単なる魯迅研究者を超えた竹内好という問題が、ようやく中国で問題視されるようになったという背景がある。

ここで、2005年に中国で出版された竹内好評論集『近代的超克』について見てみよう。『近代的超克』は4部構成で11の論文が収録されている。第一部は「魯迅」で、第二部は「大東亞戦争と吾等の決意」、「『中国文学』の廃刊と私」、「近代とは何か(日本と中国の場合)」から構成されており、それらを孫歌は竹内「精神構造あるいは思想原理」<sup>8</sup>なるものとして位置付けている。第三部は「屈辱の事件」、「戦争体験の一般化について」、「アジアにおける進歩と反動—日本の思想的状況に照らして—」、「若い友への手紙—歴史家への注文—」、「国の独立と理想」の五つの論文が収録されおり、そして第四部は、「私たちの憲法感覚」と「近代の超克」からなっている。すぐにわかるようにこれらは竹内の1940年代から1960年代の仕事のカバーしており、明らかに魯迅研究家としての竹内好というカテゴリーを超えたものである。実際『近代的超克』の表紙

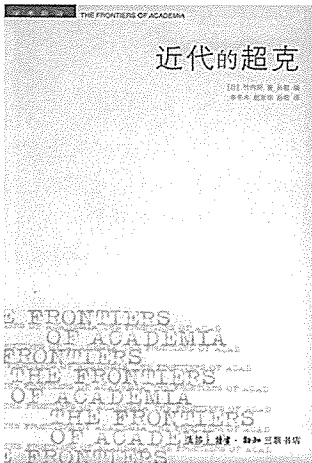


作者：孫歌  
出版社：北京大学出版社  
出版年月：2005年2月

6 張麗華「竹内好的啓示」前掲『魯迅与竹内好』、231頁。

7 『魯迅与竹内好』、前掲、303-304頁。

8 孫歌「戦後研究会報告 ベストセラー『竹内好という問い』の中国的背景」『ピープルス・プラン』(34) 2006.Spr. 135頁。



竹内好著、孫歌編、李冬木・趙京華・孫歌訳  
出版社：生活・読書・新知三聯書店  
出版年月：2005年3月

9

孫歌、前掲「戦後研究会報告 ベストセラー『竹内好という問い』の中国的背景」、139頁。

10

孫歌、前掲「戦後研究会報告 ベストセラー『竹内好という問い』の中国的背景」、139頁

11

前掲『魯迅与竹内好』、379頁。

には、次のような文句が印刷されている。

日本近代における最も重要な思想家の一人として、竹内好は中国の近代思想と文学に対して深い理解力を示しているのみならず、日本近代思想の形成に潜在的でありながら深遠なる影響を与えている。“状態に分け入る”思考方式、およびアカデミーにおける知の生産体制への根本的疑問を感じかつ拒否することによって、彼の知的立場は徹底的に非体制化され、また彼を単なる学者を超えて、彼が一生を通して尊敬した魯迅と同じ思想の闘士にしている。

つまり1986年と違い、『近代的超克』においては思想家として中国で紹介されたわけである。2005年に孫歌が明かした数字によると、『近代的超克』は、初版は8,600部ほど出版されたという<sup>9</sup>。しかも2007年には2刷目が出ており、中国において日本の研究書がこれほど売れたことがほとんどなかったということをも鑑みるに、まさに「ベストセラー」であったと言えよう。その好調な売れ行きの原因を孫歌は次のように分析する。

私の理解ではおそらく今中国社会にとって、日本は避けて通れない問題になっているんです。こういう状況の中で、考えたい人間は一所懸命に関連資料を探している。だから竹内個人の問題というより構造的な変動が一番大きいんじゃないでしょうか。<sup>10</sup>

『近代的超克』が実際に誰に購読され、いかに読まれているかについての具体的なデータはないものの、それが研究者のあいだでどのように問題化され議論されたかを、「上海シンポジウム」を通して垣間見ることができる。

## 2. 「魯迅与竹内好国際学術研討会」

シンポジウム「魯迅与竹内好国際学術研討会」は、2005年12月25～26日の二日間亘って、上海大学中国当代文化研究中心の主催により開催された。参加メンバーには上海大学の王曉明、華東師範大学の羅崗、香港中文大学の張歴君など中国文学研究者、および竹内好の翻訳者である孫歌、趙京華、李冬木、そして日本からは丸川哲史、鈴木将久、佐藤泉などが出席した。

孫歌は、ドイツでのシンポジウムがすべて日本語で行われたことと比べながら、次のようにこのシンポジウムを評している。「これは私が参加した、初めての日本語以外の言葉での竹内好に関するシンポジウムであり、しかも日本人の発表者はできるだけ中国語を使っていた。つまり、これは日本語学のシンポジウムではないのだ」<sup>11</sup>。つまり上海シンポジウムが象徴的であったのは、竹内好が異なる言語に翻訳され、おそらく彼が想定すらしなかった読者によって読まれ、議論されたからでもあろう。現にこのシンポジウムは2008年に『魯迅与竹内好』という一冊の本に纏められ出版されている。

竹内好が中国においていかに議論されたのかを、上海シンポジウムを以下の4つの点を中心に整理しておこう。

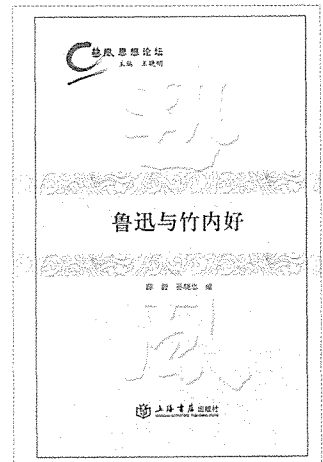
一つ目は、「竹内魯迅」の問題である。『魯迅与竹内好』に収録された論文の半数以上は「竹内魯迅」をめぐるものである。新たな竹内好思想および竹内以後の日本における魯迅研究の中国への紹介、翻訳に伴い、竹内好の『魯迅』に対して、より日本におけるその言説展開の文脈に即した議論がされるようになった。趙京華「竹内好的魯迅論及其民族主体性重建問題」、曠新年「文学と政治」、高遠東「“仙台経験”与“棄医従文”」、張寧「“竹内魯迅”的中国位置」などがそれぞれである。

二つ目は、「近代認識」の問題である。これは、西洋的近代の矛盾に対する中国の反省的態度の表明であるが、同時に中国近代の自己定位の現われでもある。そのさい竹内の「近代とは何か(日本と中国の場合)」などがこのような関心の中で読まれていると考えられる。このような形で竹内に寄せられる問題関心にはおそらく、ドイツでのシンポジウムのそれと通じるところがあるだろう。

上海大学の王曉明の「“大時代”中的“現代文学”」<sup>12</sup>はまさにそのような問題意識のなかで書かれたものである。王は19世紀半ば以来近代中国が歩んできた道が、「西洋を手本に中国を改造する」と「西洋それともソビエト-ロシアを越えてそれよりもっと良い国と世界を作る」という、西洋化/超越との二重の衝動が入り組んだ複雑な歴史であったと指摘する。人類の歴史は現代西洋に終焉するものではない。彼は中国がこのような西洋よりも「西洋らしく」なるのではなく、いかにして“西洋を超越”することができるのかと語っている。これは近代がもたらした数多くの矛盾が顕在化するなかで、半ば受動的に近代化の道をひたすら歩み続ける中国の自己反省の表明そのものでもありとされる。

三つ目は、竹内好と大東亜戦争との問題である。日本語に通じていない中国人読者は、論文集に収録された「大東亜戦争と吾等の決意」を通じて、当初孫歌らが『近代的超克』を編集した際に意図した「ドロドロの思想家の部分」<sup>13</sup>を知ることが出来たという。そのもっとも問題となる「ドロドロ」したものは、1941年12月8日「大東亜戦争」勃発後、竹内が出した「大東亜戦争と吾等の決意」宣言である。たとえば、韓毓海による「竹内好は今日の中国の読者にとって、言うまでもなく特殊でしかも敏感な意味を持っている。それはいかに戦争問題を理解し処理するか、またいかに中日関係を考えるかの問題だ」<sup>14</sup>という発言は、中国側からは侵略戦争でしかない「大東亜戦争」との関係を意識するものだ。韓はさらに「これは純粋な学術問題と思想問題だけではない」と指摘し、「戦争を起こしたにも関わらず、昭和時代の日本思想を依然として学ぶ、あるいは模倣するような“竹内主義者”は今日でも依然として存在する」と厳しく糾弾する。

韓毓海の発言へ直接応答したものか否かは不明であるが、孫歌は「中国の何人かの研究者の間にイデオロギッシュな竹内好批判が現れていた」とし<sup>15</sup>、「学者的責任」<sup>16</sup>というエッセイを書いている。そのなかで孫歌は、「イデオロギッシュな竹内好批判」を「歴史を観念的に読むこと」として批判しているが、これは孫歌が『竹内好という問い』で唱えた、思想家に向き合うさいに「政治的正しさ」から離れて「歴史に分け入る」ことによってその思想を歴史化するというアプローチとも関係があると考えられる。孫歌は、後世が思想家を裁くことを非歴史的なものとして退け、むしろ思想家の誤った



薛毅・孫曉忠編  
出版社：上海書店出版社  
出版年月：2008年10月

12  
前掲『魯迅与竹内好』、3-11頁。

13  
孫歌「戦後研究会報告 ベストセラー『竹内好という問い』の中国的背景」、前掲、136頁。

14  
韓毓海「竹内好何以成為問題」前掲『魯迅与竹内好』、39頁。

15  
孫歌『歴史の交差点に立つて』、前掲、302頁。

16  
『読書』2006年12月号。なお、「竹内好を読むこと、歴史を読むこと」と改題、前掲『歴史の交差点に立つて』に収録。

17

孫歌『竹内好という問い』(岩波書店、2005年)134頁。および孫歌「在大陸語境中「翻訳」竹内好一進出政治正統的中国論述」(台湾：国立政治大学國際關係研究中心『中国大陸研究』第50巻第1期、2007年3月)69-84頁。

18

孫歌「在零和一百之間」(代訳序)前掲『近代的超克』、62頁。

19

前掲『魯迅与竹内好』297頁。

20

孫歌『主体弥散的空间—亞洲論述之兩難』中国：江西教育出版社、2002年、17頁。

21

子安宣邦『「近代的超克」とは何か』青土社、2008年、189-208頁。

22

前掲『魯迅与竹内好』、12-22頁。

23

この本の一部は日本で『アジアを語ることのジレンマ』(岩波書店、2002年)として出版された。

選択を含めた思想的緊張および内在的矛盾に向かい合いながら歴史に分け入ることがより生産性のある知につながる、と書いている<sup>17</sup>。

上海シンポジウムにおいてこの「政治的正しさ」に言及したものは孫歌だけではない。しかしにもかかわらず、筆者が見る限り、「政治的正しさ」には具体的な定義が与えられていない。あるところで孫歌はそれを「既定の価値判断」<sup>18</sup>と説明しているが、『竹内好という問い』では、日本の歴史学をはじめとするアカデミックな知のありかたが同じく批判の俎上に乗せられていることから分かるように、それは必ずしも日本人において反射的に連想されがちな中国政府の公定イデオロギーを意味するものではなかろう。孫歌が歴史や状況に分け入ることの重要性を、日本、中国大陸および台湾、韓国などで繰り返し訴えることの真の原因および目的は、当面混沌とした東アジアでの軋轢に対し、硬直した解決策しか見出せないアカデミズムの知的生産システムを批判するに留まらず、すでに失効した既成の概念を捨てて、流動化した状況からの打開策を練り上げようと提言するところにあると考えられる。つまり、孫歌の発言はこのようなきわめて状況批判的なものとして理解しなければならない。

シンポジウムにおける「竹内好と大東亜戦争とのかわり」を「政治的正しさ」からではなく「思想史のテーゼ」にすべきだとする羅崗の発言<sup>19</sup>をこのような動きの一つとして捉えたい。というのも、日本の侵略戦争問題がいまだに中日関係の最大の問題であり、孫歌が言うように「中国と日本との研究者との間に、本当の対話ができるか、その標識はまずわれわれが戦争責任問題について率直でかつ有効な交流ができるかどうかである」<sup>20</sup>からである。

上述の韓毓海をイデオロギーに凝り固まった中国知識人との誤解を招くかもしれない。だが、ここでたとえばハイデガーの哲学とナチスとの関わりをめぐる問題を思い起こせば、より深くこの問題を理解できるだろう。筆者としては、「政治的正しさ」のみから竹内思想を片付けるべきではないという孫歌の提案に全面的に同意するものの、それをどのように行うのか、またそこから救い出される「思想」が何のためのものかについてはいまだ首肯しえない部分がある。例えば、孫歌による「大東亜戦争」の二重性という竹内好言説の語り直しになどに対しては、すでに子安宣邦の議論<sup>21</sup>があるように、私は疑う態度を取りたい。

四つ目は東アジアの問題である。これを一つの項目にすることは些か躊躇を感じる。というのも、上海シンポジウムにおいては孫歌の発言「関与後東亜論述の可能性」<sup>22</sup>以外にこの問題について触れたものは殆んど見当たらなかったからである。しかしドイツおよび日本でのシンポジウムに比べ、上海シンポジウムでは「アジア」という言葉の登場が比較的少なかったということ、それ自体が考察すべき問題であろう。もともと日本でのアジア論の長い歴史の蓄積に対して、中国のそれは極めて貧弱なものである。これに関しては、孫歌『主体弥散的空间—亞洲論述之兩難』<sup>23</sup>において詳しい議論がある。あえて中国近代史に東アジアという視点を入れることにはいかなる意味があるのか、今後注目されるべき問題の一つであろう。

以上のように、中国における〈竹内好〉という問題を四点に分けて説明してきたが、この区分はあくまでも便宜上のものであり、言うまでもなくこれらすべては緊密につながっている。これらは、後発国における近代への問い、それと関連する知の編成の

問題に纏めることができると考えられる。1990年代以後中国では、グローバル化における中国価値の問題、同一性の危機、来るべき将来に対するビジョンなどに関する議論が非常にアクチュアルであり、その意味で、非西洋にとっての近代とはなにか、非西洋はいかに主体性を獲得できるかということを追求する竹内好がこれらの問題への一つの介入になりうることから、中国知識人には彼を主題化する必然性があると言えよう。孫歌はあるインタビューで中国における竹内好研究について、「中国知識人の竹内好への反応から中国知識人の状況を見る」との視点を語っている<sup>24</sup>。中国における〈竹内好〉という問題にはまさに、上で論じてきた問題への一部分の中国人知識人の関心が如実に現われている。たとえば前述の王暁明の発言が、竹内による日本近代化への問い直し、または場合によってはヨーロッパ的近代超克論にも聞こえないこともない。中国近代をめぐる議論にとっては、竹内好および日本の近代化が一つの比較軸になりうると思えられるが、非常に残念なことに近年では中国における竹内好に関する議論はだいぶ下火になってしまっている。

24  
前掲『魯迅与竹内好』、374頁。

### 3. 日本と中国との間における〈竹内好〉

最後に、日本と中国との間における〈竹内好〉という問題に触れ、本稿を閉じることにしたい。

注目すべきなのは、孫歌の評論がおそらく一国内で読まれることを想定して書かれたものではないことである。なぜなら、そのほとんどが中国語と日本語で出版されているからである。2005年に岩波書店から出版された孫歌の『竹内好という問い』は、日本において竹内好が読み直されるきっかけの一つになっている。

一方、日本で2007年に丸川哲史・鈴木将久の編集による『竹内好コレクション』が出版されたが、その意図について丸川は、日本における細分化・集積化された中国研究では克服できないような「何か」が竹内のなかにあるのではないかと語っている<sup>25</sup>。丸川哲史の『竹内好——アジアとの出会い』（河出書房新社、2010年）の表紙には「いま、われわれは竹内好の遺産をいかに読み、いかに継承すべきか」という内容紹介があるが、ここからも分かるように、孫歌や丸川哲史のような日中を跨って活躍する研究者は、竹内好を重箱の隅をつつくような研究対象として見るのではなく、竹内の思想を通じて現在への介入しているのである。つまり、日本と中国とが互いに向き合わなければならない現在、日本と中国出身の何人かの活動的な研究者によって竹内好が蘇ってきている。このような形で浮上してきた竹内好はまさに、日本と中国との関係を反映したものであると言えよう。

25  
竹内好著、丸川哲史・鈴木将久編『竹内好コレクションI アジアへの／からのまなざし』日本経済評論社、2006年、8頁。